

年間第三主日

2012.1.22

マルコ 1・14-20

今日年間第三主日のミサの中で、私たちは三つの聖書の箇所が朗読されるのを聴きました。第一朗読では旧約聖書のヨナ書の預言者ヨナの物語、第二朗読ではコリントの教会への第一の手紙のパウロのことば、そして福音ではマルコ福音書に語られている、イエスに呼ばれた最初の弟子たちの物語を聴きました。

今日朗読されたこれらの三つの聖書の箇所が共通して私たちに語りかけようとしていることは、私たちの信仰が私たちにもたらそうとしている、信じる者たちの軽やかな生き方への招きであると言ってもよいかもしれません。

典礼暦の B 年に当たる今年の年間主日の福音は、マルコ福音書の順を追って、イエスがたどられた神の国の福音を宣べ伝える旅の足跡をたどるように、私たちが招いています。今日の福音のはじめには、神の国の福音を宣べ伝えるイエスの第一声が響いています。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」。このことばの中に、イエスがもたらされた福音全体の核心が示されています。私たちのカトリック信者としての信仰は、イエスが宣べ伝えたこの福音を信じる信仰です。そして、イエスが宣べ伝えておられるこの福音を信じる事が出来る時、その信仰は今日の福音の最初の弟子たちがそうであったように、イエスの後について行く者たちとしての軽やかな生き方へと私たちが招くのです。

そうは言っても、私たちはあの最初の弟子たちのように、直ちに何もかもこの場に残して、イエスの後について行くことは出来ません。それはそれでいいのです。ただ、私たちが信じて受け入れた信仰は、聖書において示されている神への信仰、私たちの主イエス・キリストへの信仰であるなら、その信仰はこの世の囚われから私たちに解放し、神を信じる者たちとしての、軽やかな生き方へと私たちが招くものであることを知らなければなりません。そのような観点から、今日のミサで朗読された、三つの聖書の箇所を振り返って味わってみたいと思います。

第一朗読の預言者ヨナの物語は、御存知の方も多いと思います。ヨナは、最初、神がヨナに託そうとしておられる使命を告げられたとき、それを受け入れ

ようとはしませんでした。神はヨナに、当時の世界を支配していたアッシリア帝国の都ニネベに行って、その大都会に住む全ての人々の回心を求める説教をするようにお命じなされたのです。神が遣わそうとしておられるヨナのことばを受け入れて、今回心しなければニネベの都は遠からずして、神の罰を受けて滅ぼされることになっていると告げるようにと神はヨナに言われたのです。ヨナは、神が自分に託そうとしておられる使命を告げられたとき、茫然となったに違いありません。イスラエルの神を信じていないニネベの人々が、自分のことばを受け入れるとはヨナには到底思えなかったからです。ヨナは、神がお命じになったニネベとは正反対の方角にある港を目指して舟に乗り込んだのです。そして御存知のように、その舟が暴風に巻き込まれて今にも沈みそうになった時、ヨナは悟ったのです。このような事態になったのは、自分が神の御命令に背いて、神が託された使命から逃げようとしていることに原因があるとヨナは人々の前で告白し、進んでその責任を負って、海に投げ込まれたのです。海に投げ込まれたヨナは大きな魚に飲み込まれて、三日目にもとの浜辺に吐き出されました。神が与えられた使命から到底逃れることは出来ないことを悟ったヨナが神の求めに応えたとき、今日の朗読箇所が語るような、当のヨナにとっても信じがたいことが起こったのです。今日朗読された箇所では、ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行ったと語られていますが、ヨナは決して直ちに主の命令どおりにニネベに行ったのではありません。けれども、主の命令には従わざるを得ないと悟ってそれを受け入れた時、ヨナの足取りは軽やかになったのです。彼は、それ以前の自分の思いを越えて、直ちにニネベに向ったのです。ヨナがそうなれた時、神がヨナに託してなさろうとしておられたことは実現したのです。神が望まれたニネベの人々の救いが実現したのです。

神を信じ、神のお望みに従って生きるということは、ヨナがそうであったように、決して直ちにそれを受け入れることが出来るようなことではないかもしれません。けれども、私たちの信仰は、そのことを私たちに求めているのです。私たちの信仰は、神のお望みに従って生きる者たちだけが知ることの出来る、軽やかな生き方へと私たちに招いているのです。

第二朗読で聴いたパウロの勧めのことばも、同じような響きを持っています。私たちが受け入れて信じている信仰は、この世のことが絶対なのではないことを私たちに示しているはずです。この世はいつか終わりの時を向かえ、その終わりの時には、私たちが信じて待ち望んでいる主イエス・キリストが私たちの

もとに来てくださるのです。私たちのこの世における人生の最終目標は、私たちの主イエス・キリストが来られるとき、主によって永遠のいのちの喜びに迎えていただくことにあるのです。その終わりの時には、この世のありさま、すなわち、今私たちがそれに従って生きているこの世の全体のスケーマ、価値基準の枠組みは過ぎ去るのです。私たちはパウロがコリントの教会の信徒たちに思い出させようとしている、このような信仰を生きる者たちです。だからとパウロは言います。この世の人生を生きるためにはこの世のことにかかわり、生きてゆくための財産を整え、結婚して家庭を設け、そのような人生の中で喜びと悲しみの経験を繰り返しながらも、それが私たちの人生の意味を決定付ける最終的な事柄であるのではないことを、私たちは私たちが受け入れた信仰によって知ったはずだとパウロは言っているのです。この世のことはほどほどにしておきなさいと言っているではありません。むしろ、これら全てのこの世のことは、信仰によって受けとめた最終的な私たちの人生の目標に向けて生きられるべき事柄であることを、忘れてはならないということをおうとしているのです。それらのことだけに心の全てを奪われてはならないということをおうとしているのです。このような事柄に誠心誠意関わりながらも、それに囚われて、信仰者としての軽やかな生き方を失ってはならないということをおうとしているのです。私たちの信仰はこの世の事柄に身も心も囚われている私たちの生き方から私たちを解放し、人生の最終目標をこの世を超えたところに見出した信仰者として軽やかな生き方へと私たちを招いていることを私たちに思い起こさせようとしているのです。

今日の福音の後半は、「わたしについて来なさい。あなたがたを人間をとる漁師にしよう」と言われたイエスの呼びかけに応えた最初の弟子たちの姿を私たちに示しています。ペトロとアンデレはすぐに網を捨てイエスに従い、ヤコブとヨハネは父親も舟も後に残して直ちにイエスの後につき従ったと福音書は語っています。このような福音書の語り方を聴く時、私たちは戸惑いを感じざるを得ません。たまたま通りかかったイエスにこのように言われて、ペトロとその仲間たちはそれまでの一切をその場に残して、直ちにイエスに従うことが出来たのだろうかと思ってしまうからです。けれども、私たちがそのように思うのは、福音書が語ろうとしていることを、私たちの感覚で理解しようとしているからです。

今日の福音は、ペトロを筆頭とする最初の弟子たちが実際に生きたであろう

彼らの人生の一切を削ぎ落として、ただ、イエスと出会う以前とイエスと出会った後の彼らの人生の本質的な変化を語っているのです。彼らは、イエスが言われたように、もとは魚を取って暮らす漁師として生きていたのに、イエスとともに働く、神の国のために人をとる漁師となったのです。これが、彼らを礎としてイエスがお建てになった教会の中で伝えられた最初の教会の指導者たちの人生だったのです。私たちは信仰によって開かれる、このような人生のユーモアの漂う教会の中で私たちの信仰者としての人生を生きるように招かれているのです。今日もその恵みに感謝して、その恵みの中に生きることを願って、このミサをともにおささげしたいともいます。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高